

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
 II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
 III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
 IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
 V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都府立久御山高等学校 】

1 実践テーマ	【 II・III・V 】
2 実施対象者	スポーツ総合専攻1年生 39名 2年生 36名 3年生 40名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (保健体育) ② 行事名 (小高連携事業・講演会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 (東角小学校運動会) ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	小学生との交流を通じて、スポーツの持つ力を実感させ、一人一人がスポーツ指導や交流をすることで人間的成長をすること。また、講演会から、自己の競技力向上の取り組みのための意識を改めて確認するとともに、競技に対する考えを確立する。
5 取組内容	1 久御山町立東角小学校運動会ボランティア活動 計画では、本校サッカー部が久御山町立東角小学校の運動会に参加し、パフォーマンスや運動会の補助・競技の手伝いを実施することであったが、当日雨のため運動会が中止となった。例年、小学生は楽しみにしてくれているということであり、来年度以降も継続して参加していきたいと考えている。 2 小高連携事業（1・2年生） (1) 日時 平成29年度1学期～2学期（2年生） 平成29年度2学期～30年度1学期 (2) 場所 京都府立久御山高等学校（2年生） 久御山町立佐山小学校（1年生） (3) 内容 「生涯を通してスポーツの振興発展にかかわる資質や能力の育成」を目的として、小学生に対して2年間を通じた体づくり運動を指導する。

3 パラリンピック日本代表選手による講演会
(1) 日時 平成 29 年 11 月 30 日 (木)
(2) 場所 京都府立久御山高等学校体育館
(3) 内容 寒川進氏 (オムロン京都太陽株式会社)
による講演会

6 主な成果

1 小高連携事業
(2 年生)

平成 28 年度 2 学期から事業を開始してきた。28 年度は小学生との交流と信頼関係を築くため、「自然体サンバ」などの遊びを交えた体づくり運動などを小学生と一緒にやった。29 年度は小学生の体力の実態などを踏まえ、指導案を作成して模擬授業を展開するということを繰り返し、最終的に計画した内容を小学生を迎えて実践した。5 つのグループに分かれてそれぞれ指導案を作成し、実践したが、小学生も楽しみながら参加してくれ、とても充実した事業となった。



《グラウンド実施風景》



《体育館実施風景》

(1 年生)

同志社大学より講師を招き、小学生の体力の実態やそれに応じた体づくり運動の方法などを講義していただいた。その後、小学校へ出向き、対象とする児童との交流で一緒に体を動かすことを実践した。

来年度は自分たちで計画した体づくり運動を実践するため、現段階では小学生の実態を踏まえた指導案づくりを作成している。



《小学生との交流風景》

3 講演会

(生徒の感想より)

・寒川さんのお話を聞いて、私は自分の小ささを知りました。二十歳という年齢で障害を負い、自由を奪われ、本当に辛かったらと思う。もし私が同じ立場だったら何を思っていたらと思う。その苦しい気持ちに耐えることはできたらと思う。寒川さんが口癖のように言われていた「やれば何でもできる」それはいろんなこと、生きる辛さ楽しさ、全てを経験した寒川さんだからこそ言えることだと思いました。寒川さんの言葉を聞いていて、一つ一つに重みがありました。それは寒川さん自身が経験したことだから、あなたたちにもできるんだということを伝えてくださっている気持ちの表れだと思います。私もスポーツをしていて、当然勝ち負けはあるし、努力しているかしていないかははっきり分かります。だからこそ自分と戦うことが大切だと感じたし、強い人に努力していない人なんていないと改めて思いました。自分がどうすればできないことができるようになって、できることがもっと上手くなるのか、その先を見つける努力をしなければ自分を変えられないと教えていただきました。2020年の東京オリンピックでは、競技に関わることができなくても、競技を見に行ったり、様々なかたちで関わっていきたくとも思いました。寒川さんのお話を聞いて、自分にとってすごく勉強になりました。

・寒川さんのお話を聞いて、スポーツって本当に人の心を救うんだなと感じました。交通事故で入院している時のお話で、周りの人たちが治って退院していく姿を見るのは本当に辛く、苦しい時間だったと思うし、自分ならどうなってしまうかなと思いました。伸びる選手の3つの特徴で、ポジティブに考えられる人っていうのがあり、私の周りでも強いと感じる人や、レベルの高い選手などは皆ネガティブな発言をほとんどしないし、常に次はどうしたらいいか、何が効率的か、次のことへいつも前を向いていて、止まっていることがないと感じます。やはり後悔や、弱気な発言にとらわれてばかりで、前を向けずに

止まっている人は絶対に伸びていかないと思うし、どんなに苦しい状況にいたとしても、次のことについて前向きに考えていけるような選手になりたいなと思いました。また、アテネ大会で3位になり、最後にみんなでゆっくりトラックを回っている時が1番幸せだったと言われて、とても素敵だなとおもいました。下半身が動かなくなってから自分で見つけ出した道を自力で切り開いてやっとなめたメダルをみんなで喜ぶことができる。交通事故の辛さよりも、その喜びが越えていると言えることがとても格好いいと感じました。今の目標で、2020年の東京と言われていたので、ぜひ出場してほしいを思うし、私も何らかの形でオリンピックやパラリンピックに関われたらいいなと改めて思うようになりました。私も常に新しい目標を持って生活していきたいと思います。



《講演会風景》

<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小高連携事業では、実際に小学生に対して授業を展開するということもあり、事前指導、小学生の実態の把握、指導計画と模擬授業の繰り返しを軸に取り組んでいる。また、同志社大学より講師を招き、より専門的な知識を学ぶことでより充実した事業へとなるようにしている。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会講師の決定が難しく、余裕をもった計画が出来なかった。 ・小高連携では、小学生との交流回数を増やすことが必要と考えるが、授業など時間の調整が上手くできていないのが現状である。早期から調整をし、数多く交流を実施できれば、更に充実した内容で実践できるのではないかと考える。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> (1) 運動会ボランティア活動 (2) 小高連携事業 (3) アスリートによる講演会

